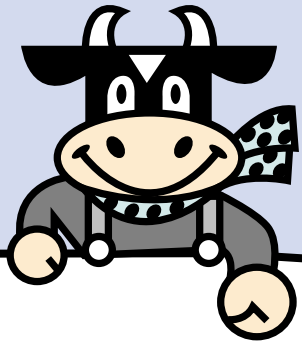




ワンポイント・アドバイス



肺虫症を知っていますか

多くの皆さんが一度は聞いたことがある病気と思いますが、通常は大規模な育成牧場で問題となる寄生虫感染症で個人の牧場では発生が少なく、ほとんどの方が見たことがないと思います。しかし実際には多くの公共牧場で感染が認められ、昨年は管内の数戸の農家で発症しており、個人の放牧を行う牧場でも予防の必要性が考えられています。今回は肺虫症について簡単に説明します。

・感染の経路

糞便中に排出された仔虫は放牧地で脱皮を2回行い感染可能な仔虫（L3仔虫）

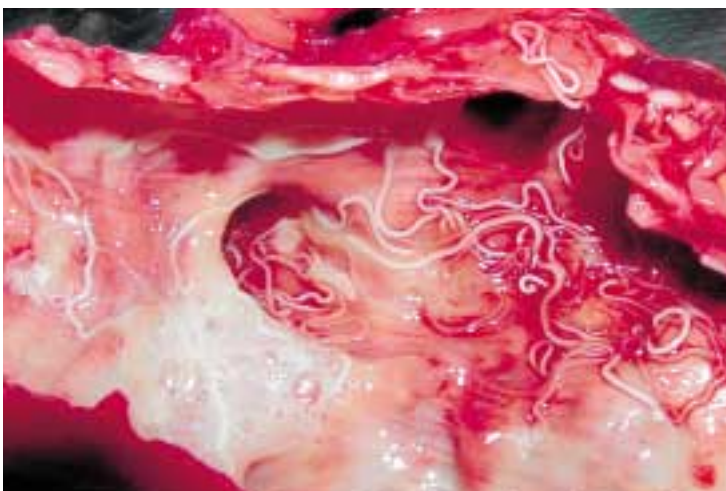
は激しい咳です。これは最終寄生部位が気管、気管支なので異物があるため牛が排出しようとする反射によって起こります。これらの症状は肺虫の寄生数によって左右されます。また咳は放牧地から牛舎に入れた時点、つまり運動後特に目立ちます。肺虫の成虫は雌雄別で大きさは4〜8mmで写真のように白いミミズのような形をしています。ちなみにこの写真の牛は肺虫症で廃用となりました。

・診断と治療法

診断は前記した症状と糞便検査により仔虫を発見することですが、仔虫が感染してから成虫になり卵を産むまでに時間差があるため、肺虫に感染して咳などの症状が出ていても糞便中に仔虫が排出さ

となり草に付着して牛に摂取されるのを待ちます。このL3仔虫は脱皮しているのですが脱皮したカラを被った状態で外界から遮断され、越冬することもあると言われています。L3仔虫は草とともに捕食された後、牛の消化管内（胃腸）でカラから出て再び脱皮し腸からリンパ管、血流を介し最終寄生地となる気管、気管支に移行し成虫となり卵を産みます。この卵が咳とともに口の中に出て嚥下され消化管内で孵化しL1仔虫となり糞便とともに排出されます。仔虫の排泄は感染3〜4週後より始まり、5〜6週後にL1クを迎え9〜10週後にはほとんどなくなります。

れていないことがあるので注意が必要です。治療にはレバミゾール製剤、イベルメクチン、ドラメクチン、モキシデクチン製剤などの駆虫薬を用いますが、どの薬も出荷制限があり搾乳牛への使用は許可されていません。



・肺虫症の症状

他の肺炎と同じく食欲不振、体温の上昇、呼吸数の増加がありますが、一番の特徴

・予防法

予防法としては購買牛、未經産牛、乾乳牛へ駆虫すること等により放牧場内への肺虫仔虫の排出を阻止することしかありません。公共牧場では年に2回ほどの駆虫が実施されていますが小さな共同牧場では駆虫していないことが多いので、未実施の牧場では定期的な駆虫を行い個人の牧場が肺虫に汚染されないように予防することが必要です。

もし下牧後、搾乳をしようとして激しい咳をしている牛が目立ったら思い出し

